

社会適応力を中心としたアセスメント方法の開発と カリキュラム編成のあり方に関する研究

－大学進学を目指した盲ろう重複障害生徒の移行期支援として－

雷坂 浩之 附属視覚特別支援学校の教員で構成する盲ろう教育研究グループ
附属聴覚支援学校高等部普通科および寄宿舍 国立特別支援教育総合研究所

本研究では、小学部5年より高等部3年まで、視覚特別支援学校において教科教育を中心とした教育を受けてきた学習の修得度は通常の生徒と比べ1～2年程度の遅れがあると思われる盲ろう生徒を対象とした。今後大学進学などを目指す上では、生活適応力に関する評価なども適切に行い、在学期間にその評価を反映させたカリキュラムを作成・実践する必要がある。そのために、文章作成力、表現力、判断力などの分析および生活面の観察や他者とのコミュニケーション能力、身辺処理・ADLなどの生活面での能力評価も併せて行い、対象の盲ろう生徒が不足する学力や能力を補うことのできる、最終在学年度のカリキュラムを考案した。この構成は、教科学習の補完的指導、盲ろう故に不足している生活力の向上という、二つの目的を両立させ得るものと考えている。

キー・ワード：盲ろう教育 社会適応力 カリキュラム

1. 研究組織（グループ）

筑波大学附属視覚特別支援学校の教員で構成する盲ろう教育研究グループ

2. 連携機関

附属聴覚支援学校高等部普通科および寄宿舍
国立特別支援教育総合研究所

3. 研究目的

本研究対象の盲ろう生徒は、小学部5年より高等部3年にいたるまで、視覚特別支援学校において教科教育を中心とした教育を受けてきた。しかし、情報の入手に絶対的なハンディを持つことから、学習の修得度は通常の生徒と比べ1～2年程度の遅れがあると思われる。そのため、就学期間を延長させて引き続き指導を継続することを予定している。学力をはじめとした盲ろう生徒の発達評価は各教科教員の経験則に基づきながら判断できるが、今後大学進学などを目指す上では、生活適応力に関する評価なども適切に行い、在学期間にその評価を反映させたカリキュラムを作成・実践する必要がある。よって、本研究は、盲ろう生徒の大学進学に伴う移行期支援の一つとして、「社会（適応）力」を中心としたアセスメントの方法を検討し、その評価をもとに不足する各種能力を補完するカリキュラムを編成・実施することを目的とする。そもそも知的に問題のない盲ろう重複障害児者は希少であり、カリキュラムや指導方法は未だ開発途中であることから、本研究の成果がこれから出現するであろう盲ろう児者の教育に益する部分が多いものと考え

た。

4. 研究方法

過去7年間の視覚特別支援学校における指導記録に残されている、当該生徒の作成した文章などをもとに、文章作成力、表現力、判断力などを分析し、既存の検査法による評価結果との比較を行う。視覚特別支援学校寄宿舍での生活面での観察や聴覚特別支援学校寄宿舍での体験入舎などを通じて、他者とのコミュニケーション能力、身辺処理・ADLなどの生活面での能力評価も併せて行い、それぞれの評価結果から判明した不足能力を重点的に指導できるようなカリキュラムを開発する。併せて、指導法の工夫を通じて、大学での学習や生活に耐えうる総合的な能力の向上を期する。

5. 内 容

(1) カリキュラム策定に向けた評価

盲ろう生徒の望ましい修業年限やカリキュラムのあり方を考えるために、以下の項目ごとの評価を実施した。

- ・高等部普通科3年時後期中間までの指導内容（指導計画の進捗状況）
- ・これまでの指導内容の定着度・理解度
- ・現在の学力評価（実際にはどの程度の学年相当なのか）
- ・現在の本人の課題（取りこぼしている内容）
- ・進路適性（本人は福祉系の大学進学を希望しているが）
- ・今後の進路を決めるに当たっての課題

(2) 聾学校体験を通しての評価

本校に在籍する盲ろう生徒の発達評価を聴覚障害教育の観点で実施した。聾学校での授業や寄宿舎生活の体験を通じ、聴覚障害を持つ生徒や教員の視点で、本ケースの表現力（手話技能や語彙）・理解力・学力・社会性・情緒（感情表出力）・生活自立度・初期の人間関係形成力や調整力・聴覚活用の可能性などの評価を受けた。また、その結果に基づき、今後のカリキュラム策定や進路指導の参考とした。

(3) 進路開拓等に向けた評価

研究チームの手作りによる一般教養テストや市販の各種テストバッテリーなどを使用し、本人の職業適性などの評価を行い、今後の進路開拓の参考とした。ただし、市販のテストのうち、画像などを多用するものは点訳化してもそのまま検査が実施できないことが判明し、複数の検査にアレンジを加えたり、実施を見送ったものもある。

る。以下が、実際に実施した検査ツールである。

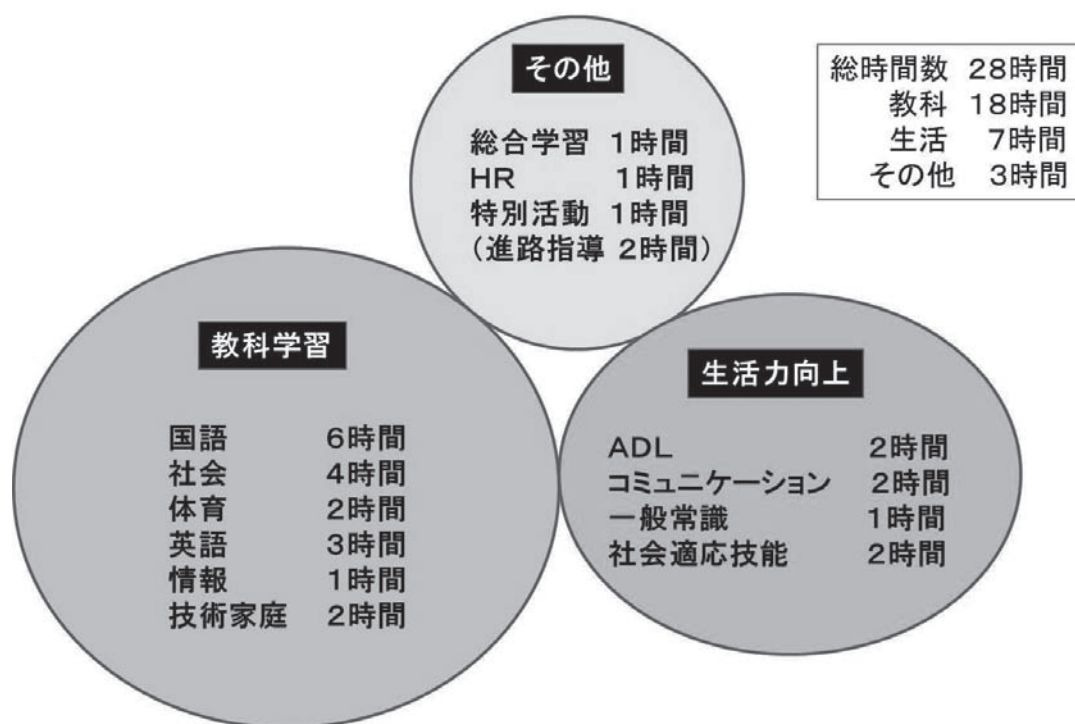
- ・TK 式読み能力診断テスト
- ・S - A創造性検査
- ・標準読書力診断テスト
- ・YG 性格検査
- ・厚生労働省編 一般職業適性検査

6. 成 果

上記のとおり、各種検査や評価を実施した結果、対象の盲ろう生徒が不足する学力や能力を補うことのできる、最終在学年度のカリキュラムとして、下図のような構成を考えた。この構成は、教科学習の補完的指導、盲ろう故に不足している生活力の向上という、二つの目的を両立させ得るものと考えている。

また、このカリキュラムのもとに、比較的「ゆとり」のある時間割を組むことで、空き時間に十分な進路指導（開拓を含む）を行うことも意図している。

カリキュラム構成



また、本研究の結果、対象の盲ろう生徒の修業年限を1年延長することとした。他の障害種の特別支援学校の現状や関連教育法等の原則に照らし合わせると、この判断はきわめて希有なものであるため、修業期間の延長理由を「盲ろう児童・生徒のカリキュラムの開発と指導法等の研究」として位置づけた。しかし、このことは、準ずる教育を受けることのできる盲ろう児童・生徒の今後

の修業期間を考える上では、貴重な前例になると思われる。

本連携研究は、平成21年度に実施されてものであり、研究対象であった生徒は、先天性盲ろう者として我が国で初めて大学に進学し、社会福祉士の資格取得を目指し、福祉系の大学で学習に励んでいる。